

前竹の修復成功記 ～初めての藤放し～

2021.2.10

相原一弘

1. はじめに
2. 破損の状況
3. 作業工程
 - ① 藤巻き
 - ② 楔打ち
 - ③ 藤放し
 - ④ 張り込み
 - ⑤ 修復方針の策定
 - ⑥ 射手村・火入れ
 - ⑦ 切詰の装束
4. 修復のBEFORE／AFTER
5. 終わりに

1. はじめに

①稲垣源四郎範士からの教え

弓が侍の表道具として使用されていた当時から、十五間の距離で歩射を修行する射手が修めるべきカリキュラムとして五射六科というものがある。

五射とは、「巻藁前」「的前」「要前(敵前)」「遠矢前」「指矢前(数矢前)」の5種の引き方を言い、六科とは「弓理」「弓器」「弓工」「弓法」「弓礼」「練心」を言う。

早大弓道部師範であった稲垣範士はこれらを生涯をかけて修練し、私は早稲田の高等学院・大学弓道部員であったころから31歳の時、先生が他界するまで、16年に亘ってこうしたことを教わった一人である。

今回実施した前竹の修復作業は弓、矢、弾等の製作や矯正方法を教えた「弓工」に属するもので、稲垣師範自身も、行射と矢所の具合を見ながら、よく弓に火を入れたり、削ったりして弓体の強さやバランスを矯正していた。「この節の辺りをもうちょっと殺すとよく中る様になると思うよ。」等と竹弓を使っているOBにアドバイスをしていた。

私はこうした作業に日常的に触れることができたことと、卒業後勝負の世界を一応離れ、前述の五射六科を詳細に伝えていただく中で、「弓工」を一通り教えて頂いたことが、大変貴重な財産となっている。

②弓師の方々とふれあい

稲垣師範は私ども当時の「若手OB」を弓師の所に連れて行って、弓の製作工程を実際に見せて、教えて下さることがあった。

これらの機会に、竹の刈り方、竹の選別方法、中ひごと言われる木材と外竹前竹の接着から、弓が仕上がるまでの工程を、弓師の方々と一緒に実物を前に教えて下さった。

師範の没後は、OBの研究会に弓師を招いて講義を聴かせていただいたり、私自身弓師の工作場に一日中お邪魔して弓の製作工程を拝見したりお話を伺うこともしてきた。

これらは弓の工作を自身で行う上では無論、行射する上でも大変有益な事であった。

ある弓師は、「弓を削るのには『荒村・中村・小村』という段階があり、売るときはその後射手自身が小村(射手村)という削って調子を合わせる作業をしてくれる前提で、『中村』の状態で売るものなんです。」という話をしてくれた。

現今の様に五つ装束と言って五か所に籐を巻いて売るのは本当は間違いで、上下の切詰と矢摺籐だけの三つ装束で売って、数年射手が調子をみながら射手村をして仕上げたら、鐙叩と勾籐を巻いて五つ装束にするのが正しいとの事であった。

弓師の方々とふれあいから得たものは多く、今回前竹の修復を自身が試みることを薦めて下さったのも東京のある弓師である。

2. 破損の状況



写真1 破損した弓の上の切詰籐を外したところ

上の切詰の籐を外すと、額木が外れ、前竹が上成節の30mm程度下まで剥がれていた。

修理するために古い接着剤をサンドペーパーで落とした。少し粗い番手のサンドペーパーでないと古くなった接着剤を落とすことはできない。

20年近く前述の射手村を施しながら使っていた比較的調子のよい弓が、引き分けの途中でバリバリと音がして、前竹が額木(弦をかける上下の銚の内、上部を額木、下を関板と呼ぶ。世上よく混同して呼ばれているが射手詞(いてことば)として注意を要する。)から上成節の30mm下辺りまで剥がれてしまった。一緒に稽古をしていた先輩からは「作者でないと直してくれないし、新しいのを買うのの半額位はかかるからよく考えて。」と言われた。複数の弓師に見せたが「接着剤の寿命です。」「仮にこの前竹を貼り合わせても、程なく他の部分が剥がれて来るだろう。」「この銘の弓師は数年前からもう年齢で仕事をしていない。」と共通したものであった。その中で「ダメで元々という気持ちで、藤巻きからご自分でやってみるとよい。接着剤は2液のエポキシがいい。」というアドバイスを下さった弓師がいらした。

藤巻きからの工程は若い頃に二人の弓師から教わっておいたが、やってみるのは初めてのことであった。竹と中ひご揃えを除いて、それ以降の全工程を自分でやらねばならず、少し覚悟が必要なことと思った。一方、削ったり火を入れたりすることで張顔、引成、ひいては矢の着点が変わってくる楽しみを知っている私には少しワクワクする楽しみができた気分でもあった。

3. 作業工程 ①藤巻き

藤巻き:前竹・中ひご・外竹を一気に接着するために、鮫や現今の多くは合成接着剤をそれぞれの全面に引いて、その上から藤の蔓でぐるぐると弓を巻き締めたことから「藤巻き」と言われる。今回は藤の蔓等入手できないので、藁縄で代用した。



写真2 藤巻きを終えた側面と正面

まず接着剤だが、昔や今でも上作の弓は鮫(魚編を使うが実際は鹿の皮を煮た煮凝りの膠)が、現在は夏場でも引けるように合成接着剤が使用される。必要な特性は乾燥後パリッとした状態になることで、セメダインやボンドでは役に立たない。弓が竹・中ひごと共に速く復元することが行射上必要だからである。

今回は2液混合のエポキシを使った。工順は①まず額木を元の位置に固定する。前後左右にズレないように接着後ガムテープで仮固定する。②固定した額木の下辺に前竹の上辺をぴったり合わせて中ひごに前竹を接着する。これもその後の「楔打ち」の工程で左右にズレないようにテープで仮固定しておく。③次の「楔打ち」で弓を傷つけないように前竹、外竹を薄い板で挟む。この時、前竹の保護板の上辺は切詰めの上すぐ下にすることで、前竹にぴったりと寄り添う。④蔓代わりの縄で上から下へ、下から上へとぎっちりと力を入れて巻く。交差部分は側面ではなく前竹・外竹上に交互に来るように巻く。

②楔打ち

これは前竹・中ひご・外竹をぴったりと貼るために前工程で巻いた蔓を締めることと、楔の打ち込み方の加減によってある程度弓の形を作る工程である。源頼政が「思はずや手ならず弓に伏す竹の 一夜と君に離るべしとは」とその重要性を少し艶のある恋歌にして詠んでいる。尚、弓を製作することを「弓を打つ」というのはこの工程のためである。



写真3 楔打ちを終えた弓の側面

巻いた蔓の交差した部分に、前竹・外竹交互に金槌で楔を打った。すでに成(弓の各部のカーブ)のできた弓の修理なので、その形が大幅に変化しないように、蔓(縄)をしっかり締める程度の厚さの楔を使った。これを打つ方向等は弓師によって様々である。楔を作ること自体に手がかかるので、今回は市販の楔を使用した。

③藤放し

1～2日楔打ちした状態で放置した後、蔓と楔を解き放つ工程

この放置の期間、弓師は成(カーブの形)が入りやすい様に、蒸すのだそうだが、今回は接着が目的なので、暖房を2日2晩入れた部屋に置いた。夏場はともかく冬季には接着剤の硬化に時間がかかるので、この方法がよいと判断した。

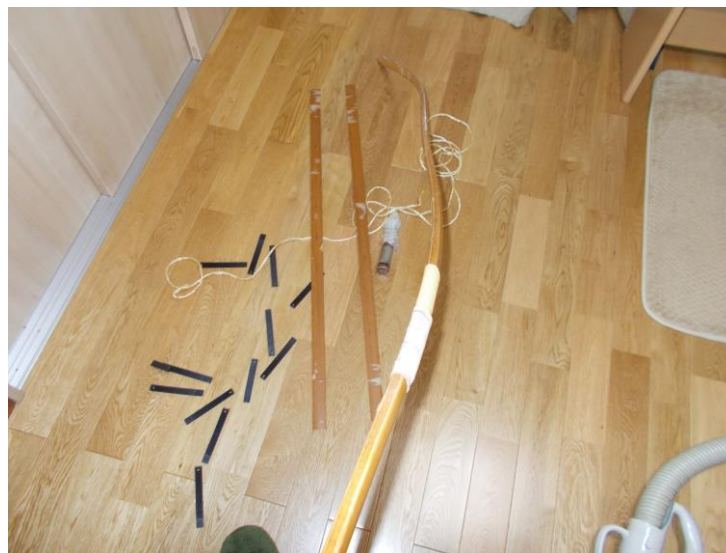


写真4 巻いた蔓と楔を解いた状態(握皮と矢摺籐は今回削りを入れることはないと思い外さなかった)

これを「藤放しの弓」と言う。稲垣師範の師匠である浦上栄範士十段は、この状態で弓を買ってきて、その後の工程を自分で工作したと聞いたことがある。「浦上栄 村」と焼印の入ったものを見たことがある。

④張り込み

弓師が新しい弓を製作する際は、この「藤放し」を数か月枯らして、上下の撥型を大体の形に切って、相当太い「張込弦」で弓を張り、その後「張台」という成を決定づける台に弓を添わせて張るのである。

この「張台」が弓師によって独特の工夫がされている。地方によって、江戸成、加州成、薩摩成などと張顔に特徴がある。

現今見かけるのは離れに際して手の内への当たりが穏やかな江戸成が主流であるが、鹿児島のある弓師さんが打つ比較的よく見かける銘の弓は握りの上下がぎゅっと内に入って、五寸の杷高に張った時に額木と弦が2分程度多めに離れた薩摩成の名残がある。射手は張台はないので、村(削り)や火入れを施して弓の成を調整するしかない。

要は、強い部分を弱めて、弱い部分を庇うのである。

張り込みの際は、テレビ等は消して静寂の中で弓の音を慎重に聞きながら握りの下部を握り、そこを押すのではなく下鉾を引き上げる様に張るのである。弓道場においても、仲間が竹弓を張るときは会話をしばし遠慮して静かにしているのが古来弓仲間の常識である。修理をしたばかりの弓や暫く張っていない弓は、弓がひっくり返る(弦が外竹の方にまわってしまう)のを防ぐため、張ったらすぐに上の切詰の部分でしっかりと弦を縛っておくことになっている。

写真5 切詰で縛って張り込む

写真から判るように、今回は藤放しをした結果、5寸の杷高に張ると、額木と弦が六分も離れてしまった。(それを切詰でぎゅっと縛ったので、結び目で弦に角度がついているのが判る。) 姫反り部の修理であったので、その部分が弱くなってしまったのである。

この後の射手村と火入れで何とかして額木と弦の間合いを3分強狭めねばならない。



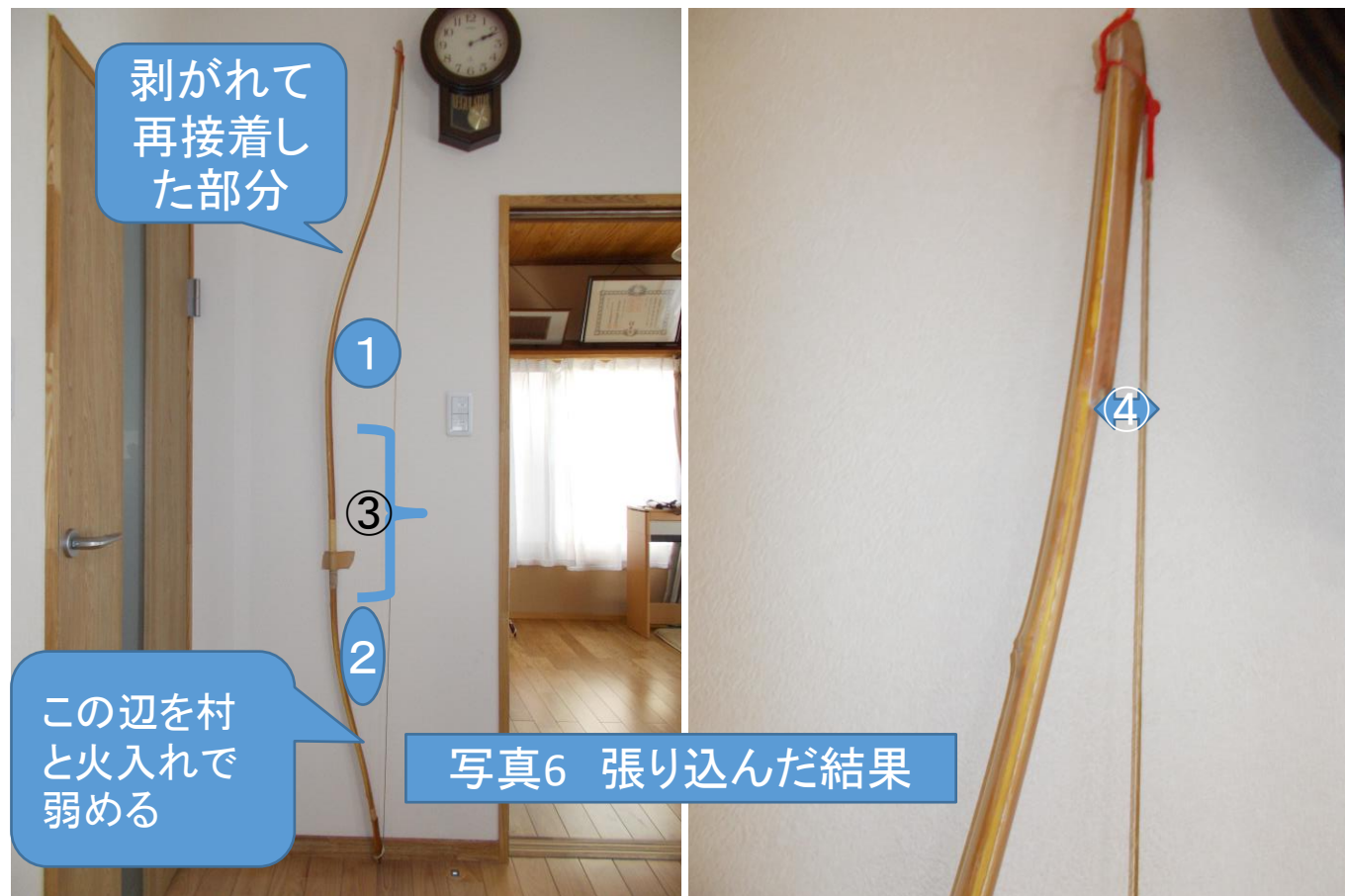
⑤修復方法の策定

張り込んで一日程度置き、弓のどの部分を矯正するかを決めるのである。

目安として、弓は上成節と下成節の辺りの①②の部分に同じ程度の大きさの○が入る程度がよいとされている。今回張り込んだ結果②の○が①より少し小さい。

③の部分(握りの上下)は「胴は強味処」と言って、僅かに内側に入るのがよく、これが平らか外に出たものを「舟底」と呼び矢勢が出ない。この部分はまあまあこの程度でよい。

問題は④で、杷高5寸に張って1.5～2分程度の弦間(つるあい)がよい。これが6分程度に開いている。姫反り部の前竹が剥がれたものを接着したので、姫反りが弱くなったのである。



姫ぞりの弱い所は強くすることはできず、接着剤の強度の問題もあり反りに火を入れて立てることも危険である。矯正方法としては下成節より下、引掛節辺りまでを弱くすると、②が少し膨らみ、①が引っ込む。結果として姫反りがもう少し立って、④の弦間を狭めることができる。③の胴を崩さぬために、引掛節の上下を弱める射手村と火入れを数回に分けて施すこととした。

⑥射手村と火入れ

射手が弓の側面を削って弓力や上下の強弱を矯正するのを射手村とか小村という。また弓を火で温めてカーブを矯正することを火入れという。



写真7 射手村の様子と道具

＜道具＞ 「木そげ」という道具を使う。凹面の方向に道具を滑らすことで、刃が弓に喰い込むことなく安全に弓が削れる。これを砥石で研ぎながら弓を削る。写真の道具は私が30歳台の頃に京都の弓師柴田勘十郎氏から頂戴したもので、私の宝物の一つである。需要量が限られているため、買い求めるのは大変でしかも弓を買う位の値段はする。厚めのガラスをパンと割った面で代用することが可能である。小刀や鉋で削るのは刃が弓に入ってしまうリスクがあるので禁物である。

＜射手村＞ まず今回ははみ出した接着剤を取り除く様に削った。姫反りという弓で一番弱い部分なので、弓体へなるべく刃が入らないように削った。次に、⑤項で述べた引掛節を中心にその上下の側面を削り弱めた。

一度に削る量は木屑が掌で一握り程度で、この量を「一村」という。一村しては弓を張って一晩置いて張顔を確認し、また一村と、毎日自分の施した村で弓が変化してゆくを見る数日は至極の楽しみな時間である。



写真8 火入れと矯正

カーブを村だけで矯正できない場合は、弓に火を入れて温めて、手や足でカーブを矯正する方法をとる。また、容易に火入れで矯正できるように村で削って弱くして火入れで矯正することを併せ行う。

今回は引掛節辺りを削っては火を入れて矯正し、また削っては火を入れて・・・を3日に亘って繰り返した。

火を入れたら足で踏んでギューツと曲げると曲がりやすいが、今回は下の切詰に近い部分を支点にせざるを得ないので、下の切詰の破損防止のために手で少しずつ前竹を押して曲げる方法をとった。

この火を入れる方法であるが、写真の様に弓を前後に動かしならまた回転させて前竹・両側面・外竹を均一に温めるのである。火の入れ方は温度を手で触って覚えるしかないが、「あちっ」と感じる程度で、かつ焦がさぬ様に十分な注意が必要である。ハンカチを一枚挟まないと握れない程度が丁度よい。

これをストーブなどでやると焦がしてしまう恐れがあり、私もかつて苦い思いをしたことがある。電熱コンロがよい。好きな部分を集中して加熱できる。

尚、上下の切詰に火を入れることは禁物で、前竹が剥がれてしまう。

さてこれを3日繰り返した結果、額木と弦の弦間は6分程度あったものが3分程度にはなった。あと1分強何とか狭めたいが、引掛節の削りは3村も取ったために限界であった。これ以上削ると4枚ひごの弓の両側2枚のひごが無くなってしまう。火も3回入れているので、これ以上は接着剤の強度から考えると危ない。

そもそも私のこの弓は鯢弓ではなく合成接着剤の弓なので、火入れも村も効きにくいことは効きにくいのである。それでも6分の弦間を半分までは持ってきた。

ここから稲垣先生や浦上栄先生、弓師である松永重宜氏の著書を改めて半徹夜で読み返した。目に留まったのは肥後三郎の節の高さに関する記述である。

こうした上作の弓を使いこなす技量に自信がないので、私は使ったことがないが、先代松永重児氏の頃から、節の高さを低くして節を殺す(穏やかにする)方法があるらしいことが判った。

翌日早速引掛節の高さを小刀で低く削るとみるみる(と言っても数mmのこと)この部分が弱まり、相対的に姫反りが立ってきた。結果引掛節はほぼ完全に殺す結果となった。

この方法を素人が取り入れることの是非はともかく置いて、結果としては、思い描いた通りの張顔の弓に復元することができた。



写真8 節を小刀で低く切っているところ

⑦切詰の装束

籐を巻くのを装束を着けるという。装束と言っても上下の切詰籐は額木、前竹、関板が剥がれぬためのもの、矢摺籐は発射に際して矢が弓を削らないためのもので実用上必要なので必ず着ける。鐙叩と匂籐はアクセサリーである。

写真9 上の切詰の籐を巻きなおしているところ

まず額木と前竹の合わせ目の最も接着の弱い部分にぎゅっと糸を巻き、再びこの部分が中ひごから剥離しないようにした。つまり額木の段の部分から前竹上部にかけて糸を巻いたのである。

矢の作糸(はぎいと)巻と同様に、弓を回しながら巻き際の糸を親指と人差し指で挟んで張力を持たせてしっかりと巻くのである。

その後、一晩水につけて水を吸わせて柔らかくなった籐を糸を巻いた上から元の通りしっかりと巻き、籐べら(とうべらではなく「とべら」という。握り皮と矢擦籐の境を籐頭(とがしら)というのと同じ。私の持っている籐べらの先端は稲垣先生が削って下さったもので、非常にうまく使える。)で端を中に挟み込む。

籐が乾くと一層締まるのである。

……これで完成である。



4. 修復のBEFORE／AFTER



写真10 藤放し→射手村・火入れ後の完成

下部の所謂乙腰の内側への入りが緩まり、姫反りの上部が立って来た張顔と、額木と弦の弦間が狭まったことが判る。写真で写すと大変微妙なものだが、1週間毎日その変化を見ていると、自分では劇的に変わっていることが判るものである。

写真11 引成の確認

張顔がまずまず完成したら、念のため引成を確認する。引成というのは引いた状態の弓の形を言う。

本当は仲間に肩をいれてもらい、正面からその形を確認する。学生時代時々稲垣先生に「はいって言うまで引いてみてくれ」とやらされた覚えがある。

写真で自撮りして見ればよい訳であるが、上部の接着した部分は弱いながらも姫反りの強味は残っていてここはまずまずである。乙腰より下の強みも何とか残っている。少し胴が強い感じがするが、これは今後私が加齢とともに弓を弱くしたい時には、胴の部分に村を加えられることを暗示していると言える。ただしそれまで「寿命」と言われた他の部分の接着剤が持てばの話である、

弓は握りを持った瞬間に、軽く感じられると上下のバランスがよいと言われるが、持った感じもまずまずで、今回の修復は成功と判断してよいと思う。

この後、的を引く前に、少し矢束を詰めて的矢より重い棒矢をかけて巻藁をしばらく射こみ、弓を落ち着かせるのである。

巻藁を引いた感触や弦音も上々であり、満足した。



5. 終わりに

初めての藤巻き～藤放し、そして射手村・火入れの工程を1週間かけてやってみたが、実に楽しい1週間であった。

折しも新型コロナウイルス感染防止の緊急事態宣言発令下、職場にも感染者が発生する事態となり、週一回程度の東京への出勤で、あとは自宅でのテレワークとなっていたため、仕事を終え、弓道場での稽古をして、一杯やりながらの夕食を済ませて、それから2時、3時まで取り組んだため、連日5時間程度の睡眠で寝不足状態になってしまった。しかし完成を見た弓と、それを巻藁で射込んでみて、「うまいいった」と感じた喜びはひとしおのものである。稲垣先生と弓師の方々のご指導に改めて頭が下がる。

新弓を買う半額を覚悟したが、材料代2千円程で済んだ。

この射手村であるが、一般の家庭の部屋で試みるため、新聞紙を敷いてやっても、部屋中の隅々に木屑やらが散乱する。作業後は毎回念を入れて掃除機をかけぬと、翌朝家の者から「靴下の裏が木屑だらけになる。」等と思わぬ輦蹙を買う。また、弓を張ったり外したりを繰り返すので、この様に小さな木片に彫刻刀で穴をあけたものを用意してやると、家の中のどこででも弓を張ったり外したりでき、長押や壁に傷を作って叱られることもない。「弓工」に当たって最も注意すべきことかもしれない。

